



猿賀神社例祭

(平川市〈旧尾上町〉・1940(昭和15)年頃。弘前市弘前図書館蔵)

今年の十五夜は9月27日。翌28日は月が地球に最大限に接近し特大の月が見られるスーパームーンとあつて各紙紙面を満月の写真を飾った。このような月見、また旧暦8月15日の「中秋の名月」や「十五夜」ではないだろうか。津軽

富士の裾野、弘前郊外にあるわが家でも例年、十五夜には畑仕事の帰りにススキを刈り、栗や枝豆、とうもろこしをゆで、おはぎをこしらえる。月の出を待って東側の窓辺にススキとそれらの供物、果物をそなえ、ろうそくに火を灯して拝む。ただ手を合わせるのでは届かないから、柏手を打つように教わった。今年の収穫への感謝を込めて「月を拝む」のだという。

いっぽう、下北の漁村の例をあげると、脇野沢村九艘泊・蛸田では、屋根の上の祭壇を設け、月の出を待って村のはずれの方から順に拝み、その後も屋根の上で飲食をする。屋根に登るのは、月に早く願ひ事が届くからという。脇野沢村小沢では、この日の月にか

かる雲の具合によってタラ漁の豊凶が占われたというのも興味深い(『青森県史 民俗編 資料下北』)。

月見は、楽しみみのひとつであった。板柳町高増集落の暮らしを記録した村上健次郎氏『昔の農民の暮らし』(1990年刊)では、十五夜について「子供等は月に供えたいろいろな果物や、その家によつては餅を作つて供えたものを取るに行つたものだ。(中略)縁側の机の上に供えているのを家人の一寸の目を離れた瞬間に取るのである」とある。

こうした供物を咎なく自由にとつてもよいとする慣習は他地域にもみられ、神々への供物を共同飲食した名残りといわれる。今別町奥平部では「十五夜のツト投げ」といって、子どもたちが藁わらに紐をつけて、「つと」と叫んで家に投げ入れ、その家人らが果物などをに入れて返したという

(『青森県史 民俗編 資料津軽』)。

津軽においては、旧8月15日の祭りといえ、平川市猿賀神社(旧尾上町)の大祭も欠かせない。近隣の村々ではこの日の農作業の休日にあたり、かつては8月朔日の岩木山お山参詣と同様に津軽各村からサイギサイギの行列が猿賀さまへと行列をなした。旧平賀町小和森では、午前中に稲刈りをして午後には猿賀さまへお参りに行つたという。

森山泰太郎氏は『津軽の民俗』(1965年、陸奥新報社刊)において、戦前のころまでは、十五夜の月見には、シラゴメと

十五夜の月見

福島 春那

(県民生活文化課
県史編さんグループ事務嘱託員)

こうした供物を咎なく自由に

いたって、まだ熟さぬ稲を刈り、煎つて臼で平たく搗いたものが欠かせない供物であったことを述べ、今年の新穂をささげて感謝し収穫までの無事を祈願する祭りであつたと指摘する。十五夜の月見は、美しい月を眺めるだけのものではなく、暮らしぶりに即した祭りの意味を持つ行事であつたのだ。